

目次

序 章 「昔はコーチなんていなかった」

監督の手柄に吸収されるコーチの功績

わかりにくい「名コーチ」の条件

昔はコーチなんていなかった

「なまけもの」の王の素質を開花させる

今の球界にも続く「荒川道場」の師弟関係

チームの先輩がコーチ役だった時代

コーチとは自分に合うものを見つけ出してくれる存在

19歳の江夏が悩みを打ち明けたコーチ

コーチも選手から教えられる部分があっている

恥をかって聞きに行くことが大事

コーチ業はいろんなチームから声がかかってナンボ

3つのタイプに分類できる、プロ野球のコーチ

第1章 石井琢朗

常に100点満点を目指す必要はない

7割の失敗も生かして攻撃してほしい

併殺打の間に1点でも「ナイスバッティング！」

泥臭くても1点を取る姿勢を示したベテラン

はじめに意識ありき

コーチングとティーチングの違い

ずっと横浜についてコーチになつていたら

第2章 鳥越裕介

自分では鬼の部分は出してないつもりでした

技術よりもまず人だ、と思ってるんで

球の扱いひとつ、練習と試合の差があり過ぎた

打つのは3割でも、守備は10割、できるはず

第3章

橋上秀樹

100%できることを疎かにしたら負けますよ

なんでも怒られないようにやるのは違うだろ？

どんなに野球がうまくても普通のことのできなきゃダメ

父性と母性、両方を併せ持つ指導者を目指す

星野さんよりも100倍怖かった、島野さん

親だからこそ、子に対して鬼になるべきときはある

データを提示しながら個別の対話を心がける

当初はうまくいかなかった、選手個々の意識改革

選手とのギクシャクした関係を乗り越えて目標達成

あえてこちらから細かく言わないほうがいいときもある

打つ以外のことも意識付けできていた〈山賊打線〉

即戦力の新人にはあまり口うるさく言わないこと

おまえの本当の武器は何だ？ 何でお金を稼ぐんだ？

第4章

吉井理人

設定した目標が違ふ以上は、その過程が変わるのは当たり前
自己分析で己を知ると、ポイントを絞って徹底的に練習できる
野球とは無縁の接客業の経験がコーチングにつながった

チームの勝利よりも選手の幸せを考えてやる

自分の研究テーマに沿って選手にインタビュースせてもらった

コーチは選手の邪魔をしたらダメ、指導しちゃダメです

コーチが簡単に答えを言ってしまったら選手のためにならない

今も自分の力不足を感じるし、指導者こそ学び続けなさいといけない

上下関係を取っ払って信頼関係を築かないとうまくいかない

伝えるというよりも、気づかせていくということ

なぜ若い投手がマウンド上でパニックになるのか

感情とパフォーマンスはがちりつながつている

はじめは「最低な職業やな」と思いながらコーチになった

あんまり「名コーチ」って言われるのは嫌でした

第5章 平井正史

選手のとときの自分と、指導する選手を比べてしまったのは反省点
選手が自主的に動けるよう、うながしてあげたほうが覚えは早い
選手にくつつき過ぎると、選手が自分で考えなくなってしまう

コーチの役割を選手が果たしていた落合中日のブルペン

振り返りは「たら・れば」になることがあるので言い方に注意

岩瀬さんでも気にしていたリリーフならではの数字

「ここはオレが出ていく！」となるぐらいの「投げたがり」が理想

入団当初から故障させないことが第一だった山本由伸

選手に対して過保護にしないように心がけている

ど真ん中でも抑えればいい、クソボールでも振ったらストライク

第6章 大村 巖

高卒の新人は「ちゃんとユニフォームを着なさい」と言うことから

選手のタイプや現状によって自分がいろんな人間に変化する

新しいコーチがいきなり「おまえ、こう打て」はあり得ない

「糸井を1カ月でなんとかしろ」と言われて

指導に悩んでいるとき、ペットの飼い方の本を読んで救われた

「やっぱり筒香はダメか」と思われたときが大チャンス

4番バッターに求められるのはホームランだけじゃない

〴〵やんちゃな新人選手には特にティーチングが必要

選手に「腹立ってます」と伝えたところでどうにもならない

「おまえはこれをやれ」と言われるままだった現役時代

理想のコーチングは「オレが教えた」とは正反対

終章 「名コーチ」と言われたくない

本当の「名コーチ」の条件とは？

指導者のライセンスは存在しない野球界

今も変わらない、日米のコーチングの違い

押しつける指導者は反面教師

大事になるアナリストとコーチの関係性

おわりに

文中写真／日刊スポーツ（第1章、第2章）、小池義弘（第3章～第6章）

本書は集英社のウェブサイトをweb Sportivaでの連載「チームを変えるコーチの言葉」に加筆・修正したものです。

ウェブ初出記事の公開日は以下のとおりです。序章、終章は書き下ろしです。

第1章	石井琢朗	2017年9月22日
第2章	鳥越裕介	2018年4月16日
第3章	橋上秀樹	2018年7月17日
第4章	吉井理人	2018年11月8日
第5章	平井正史	2019年4月13日
第6章	大村巖	2019年8月9日

序章 「昔はコーチなんていなかった」

監督の手柄に吸収されるコーチの功績

なぜ、監督と選手だけに光が当たるのだろうか――。

筆者がプロ野球の取材をするようになってから、ずっと思ってきたことだ。

なぜ、監督でもない、選手でもない、コーチには、光が当たらないのだろうか。チームの優勝が決まったあとは特にそう思っていた。コーチもチームの一員として貢献しているはずなのに、チームの勝利はあくまで監督の手柄になる。

もちろん、まったく光が当たらないわけではない。シーズン中、首位を走るチーム、好調のチームにおけるコーチの仕事ぶりが、マスメディアに取り上げられることはある。選

手への指導が功を奏している様子が伝えられることもある。

が、それはまずシーズン中に限られるのだ。いざ優勝が決まれば、監督の采配と選手の活躍度に焦点が絞られていく。そうして、結果を出した監督の記事が書かれ、貢献した選手の記事が書かれ、テレビのスポーツニュース番組などへの出演もあれば、一冊の本にもなる。さまざまな監督論、いろいろな選手論が形になって世に出ていく。

しかしながら、コーチ論はなかなか世に出ていかない。現役のコーチの本は片手で数えられるほどしか出ていないし、シーズン中に記事などで知ったそのコーチの功績にしても、優勝した途端に監督の手柄に吸収されてしまう。コーチについては、唯一、解任されないこと^{あかし}が評価の証なのかもしれない。

では反対に、チーム成績が下降、低迷したときはどうか。確かに、その責任は監督ひとりが負うことになる。ただし、責任をとって辞任することになれば、コーチも一緒に辞めるケースは少なくない。指導した選手たちの成績が向上して、一コーチとして手応えを感じていても、辞めなければいけないときがある。はたまた、成績が下降したチームでも監督は辞めず、一部のコーチが詰め腹を切らされるときもある。

わかりにくい「名コーチ」の条件

監督と選手の間には挟まれたコーチ。それだけに中間管理職の悲哀さえ感じてしまうが、ひとつお断りしておくのと、ここまでは一軍の話。これが二軍となると若干、話が違ってきて、チーム成績に関して、一軍ほどの責任は二軍の首脳陣には負わされない。

そのかわり、将来のある若い選手をしっかりと育成していく上での責任は重い。重いのだが、二軍の首脳陣に光が当たるとはゼロに等しい。選手にしても、二軍から一軍に上がって結果を出すまでは注目されないも同然だ。

すなわち、プロ野球の世界は、一軍で結果を出す者以外、光が当たりにくい。これはしかし、ある意味では仕方がないことだろう。二軍が一軍へのプロセスであるのと同様、コーチの職務も、結果を出すことではなくプロセスがメインになるからだ。言い換えれば、チームの結果が悪くとも、コーチの職務としては成功している場合がいくらかもある、ということだ。

結果と違って、プロセスは形になりにくく、外から見えにくい。監督と選手には成績と

数字が付き物だが、コーチには成績も数字もない。したがって、勝利への貢献度も見えにくいし、評価もされにくい。「名監督」と「名選手」は数字がひとつの条件になる反面、「名コーチ」は何が条件になるのか、わかりにくい。

わかりにくいから、実際にコーチに取材してプロセスを明らかにしたいと考えていた。

選手が技量、力量を高めていくプロセス。ベンチで監督を支えるプロセス。そのなかでコーチは、どのように関わっているのか。どんな思いを持って向き合っているのか。監督論や選手論には表れないプロ野球の姿を、コーチの言葉を通じて表現したいと思う。